

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	白石 奈津子
論文題目	フィリピン・ミンドロ島の民族関係から見る共同性の諸相 —生活世界の経済取引からみた差異とつながりに着目して—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文の目的は、フィリピンの東ミンドロ州におけるタガログ／マンヤンと呼ばれる二つの民族の相互関係の事例から、民族間の差異と分断を越境する共同性の在り方を考察することにある。それにより、これまで国家レベルの公共言説空間における問題として語られがちであったフィリピンのエスニシティの議論を、日常の生活世界における問題としてとらえ直し、それが分断とつながりの両義性を持ちながら維持される過程を描き出す。従来の研究において不可視化、もしくは過剰に他者化されてきた少数民族とマジョリティ社会の関係の分断と連続性を有効に議論するために、二つの民族間の関係を、双方の社会の出来事と語りから記述し、経済取引を中心とした具体的コミュニケーションにおけるカテゴリー・イメージの作用に着目して分析している。</p> <p>序論においては、フィリピンにおける社会集団をめぐる従来の議論、特に「山地民／低地民」として語られる集団間関係の議論に見られる偏りの歴史的背景を、アメリカ統治期の制度まで遡って、制度や研究パラダイムの変遷から整理したうえで、フィリピン研究や民族関係にかかわる先行研究に対する本研究の位置づけを明らかにしている。</p> <p>第一章では、ミンドロの歴史をフィリピン国家の歴史を参照しながら整理し、議論の対象とする二つの民族間の境界が形成されてきた社会状況を論じる。そこから、調査地がフロンティア地域として位置づけられてきた歴史と、諸集団の移動の過程で差異が作り出され、民族境界が形成された過程とが、不可分であったことを明らかにしている。</p> <p>第二章では、それぞれの集落に関する全体の社会経済データを整理しつつ、特に両者の結節点として、タガログ社会で見られるフノサンという稲作収穫労働慣行に着目した分析を提示する。また、このフノサンと対照を成すウパハンという安価な賃金労働が、フノサンの代替としてマンヤンの労働力によって担われていることを指摘する。これはタガログ社会におけるマンヤンの搾取ととらえられる反面、マンヤン社会で行った調査データをもとに、それが流動的な労働機会であるからこそマンヤンにとって有用であることを分析している。</p> <p>第三章では、マンヤンとタガログの間のアモータオハン関係という日常の食や住などを共にする場合もあるパトロン－クライアント的な労使関係の事例から、二つの民族集団の間で見いだされる相互関係とその社会文化的意味を検討し、そこに現出するカテゴリー・イメージについて論じる。そうした相互関係は、日常的に人々が無意識に持つ相手に関する「こうあるはず」という予測に切り込んでその変換を迫るものとなる。それは、規範やロジックに基づく積極的な交渉ではなく、相互に共有していない知識や習慣、イメージを</p>			

めぐる無意識の交渉として描かれる。個々人の経験として語られる関係からは、対人コミュニケーションが必然的に持つ偶有性に、カテゴリーという社会的枠組みが重ねられることによって、相互作用の中に期待と裏切り、他者像の形成と反転といった事態が、ネガティブ、ポジティブ双方の性質を伴って、繰り返し生じる様子が描出される。また、その過程において、出来事と経験に基づいて更新されたカテゴリー・イメージが揺らぎを含みつつも共有され、再び人々の相互作用が展開される基盤を形成していくことを明らかにしている。

第四章では、タガログ社会の圃場で、刈り入れ後にマンヤンの人々が行う落穂拾いの実践を検討する。そこではコミュニティの外部者として到来する匿名のマンヤンによる落穂拾いをタガログの人々がなぜ許容するのかという問いから出発し、そうした資源共有の周辺で展開されるカテゴリー・イメージや差異の文脈、越境する共同性や共生のあり方を論じる。人々から提示された説明は必ずしも一貫せずに混線しているようにも見えるが、実際の経験の中では、それらは文脈的連続性と重なりを持っている。そこに見いだされるのは従来議論されてきたモラル・エコノミー的な倫理ではなく、タガログ側の情動を伴う規範、未知なものとの交渉の仕方や共有に関する作法など、両社会における倫理や力をめぐるロジックが重なりあって形成された多層的な理解である。そうした重なりと連続性を持つ様々な解釈は、それぞれにリアリティを保ち、落穂拾いに参与する側、受け入れる側、双方の間の結果論的共生を成り立たせている。

結論では、第一章から四章までの議論を整理し、調査地におけるエスニックな差異をめぐるコミュニケーション過程が、時に関係性や変化に対するクッションとして、時に分断と共同性との間を往来する経験の基盤として、他の文化的な文脈とも連動しながら、エコロジカルなカテゴリー、差異と共生の環境を形成していることを指摘する。